まえがき

本書『書物の愉しみ』は、一九八七年から二〇一八年までのおよそ三十年間に書いた、書物にかかわる文章のほぼすべてを収めたものである。もっとも多いのは、おりおりに刊行された書物についての書評だが、このほか、解説や書物に関連したエッセイなども合わせて収めた。基本的に発表された年月順に収めたが、こうしてみると、自分でも驚くほど分量が多いため、全体の構成を三部に分けて収録した。そのうちわけは以下のとおりである。

第Ⅰ部「書評 1987〜2007」には、はじめて書評を手がけた一九八七年から二〇〇七年の二十年間に発表した文章を収めた。ここでもっとも分量が多いのは、「朝日新聞」の書評欄に一九九八年四月から二〇〇一年三月の三年間に掲載された文章である。これ以前に書いたものには、なんらかの形で中国に関連したものが多いが、この三年間に書いた文章は、日本や欧米などの小説、随筆集、映画等々に関する書物で、ことにおもしろく思ったものも積極的に取りあげており、かなり幅が広くなっている。

第Ⅱ部「中国の古典 中国の歴史」には、中国の古典文学や歴史そのものを対象とする翻訳書や論考、および中国史上の人物を取りあげた書物についての書評を収めた。ここで中心になっているのは、『週刊エコノミスト』の「歴史書の棚」に二〇〇八年七月から二〇一一年三月に至るまで掲載された文章である。なお、ここで取りあげた書物は新刊書に限らず、刊行後、かなり時間がたっているものも少なくない。

第Ⅲ部「書評　２００８〜２０１８」には、タイトルどおり二〇〇八年以降二〇一八年までに発表した文章を収めた。ここでもっとも分量が多いのは、「毎日新聞」の書評欄に二〇〇八年四月から二〇一八年十二月までの十年間に掲載された文章である（「毎日新聞」の書評執筆は現在も継続中）。ここに掲載された書評はますます幅が広くなり、欧米のミステリやロックンロール等々に至るまで、私自身が大いに好むジャンルの書物もどんどん取りあげている。

という具合に、まことに多種多様、盛りだくさんの書評集なのだが、こうしてまとめていただくと、先にもふれたように、なにぶん分量も膨大であり、長い年月、書評を通じて自分がいかに書物の世界を愉しく逍遥させてもらったか、しみじみと実感される。ここにあらためて、自由に書かせてくださった記者や編集者の方々にお礼を申しあげたいと思う。

さらにまた、この書評集の背後には、三十年の歳月が流れており、ああ、こんな本もあったと、懐かしく思い起こすとともに、書物をよすがに、自分自身の来し方や時代の移り変わりをふとたどりなおしたりする。この本を手に取り読んでくださる方々にも、そんなふうに、それぞれみずからの生の軌跡に重ねあわせながら、この書評集を読んでいただければ、うれしく思う。

付言すれば、ここで取りあげた書物には、いわゆるベストセラーは少なく、おりおりに光彩を放ち、おもしろく読んだものを掬いあげた場合が多い。こうして本書にその書評が収められ、そのおもしろさがふたたび日の目を見ることができれば、これにまさる喜びはない。

本書の刊行にあたっては、岩波書店編集部の古川義子さんにたいへんお世話になった。古川さんには今

まで多くの本を作っていただいており、今回も膨大な書評群を、快刀乱麻を断つごとく、基本的に編年に並べ、みごとに三部構成にまとめあげてくださった。ここに古川さんに心からお礼を申しあげたいと思う。

また、装丁は、これまた私の多くの本を手がけてくださった坂口顯さんがやってくださり、美しい本にしあげてくださった。また製作担当の大宅尚美さんはエレガントで読みやすい本にしたててくださり、校正の秋山研吉さんはしっかりきめ細かに校正してくださった。坂口さん、大宅さん、秋山さん、ほんとうにありがとうございました。

なお、本書に収録された書評については、各文末に初出年月日、また巻末に初出一覧および主要作品名・著者名索引が付されている。おりにつけ、参照いただければ幸いである。

二〇一九年四月

井波律子

目　次

小見出しには書評対象書目の書名をあげた。複数の本をテーマとするエッセイの場合は、タイトルに〈　〉を付した。
Ⅰ・Ⅲ部の小見出しは初出年ごとに示した。

まえがき

書物あれこれ 1 ――〈三つ子の魂、百までも〉1／〈忘れられない一冊〉2 …… 5

Ⅰ　書評（一九八七～二〇〇七）

［一九八七］魯迅ノート 6
［一九八九］孔子 8
［一九九〇］後宮小説 10／村の名前 11
［一九九一］夏姫春秋 12／客家 13
［一九九二］百年の孤独 15
［一九九三］〈宮崎史学の魅力〉17／消えた万元戸＆土牢情話 22／ワイルド・スワン 25／フローラの肖像 26／棺を蓋いて＆私の紅衛兵時代＆キッチン・ゴッズ・ワイフ 28
［一九九四］中国人の日本観 30／天怪地奇の中国 32／檻獄都市 33／〈「異界」と現実〉35／最後の宦官 39

〔一九九五〕〈幸田文と身体感覚〉41／〈幸田露伴〉45／桃源郷の機械学 49／明末のはぐれ知識人 50／中国山水画の誕生 52／幸田文の箪笥の引き出し 54
〔一九九六〕孟嘗君 56／杉本秀太郎文粋 58／北京好日 61／上海 62
〔一九九七〕龍あらわる 63／わが幻の国 66／中国怪食紀行 70
〔一九九八〕逆光のオリエンタリズム 73／介子推 74／安倍晴明伝 80／〈名探偵を、探偵すれば〉81／全ての人は過ぎて行く 83／生命の樹 84／蔡元培 86／お茶をどうぞ 87／鬼の宇宙誌 89／人われを漢奸と呼ぶ 95／魔法 98／レトリック感覚 106／狂気の王国 107／読書の首都パリ 109／翔べ麒麟 110
〔一九九九〕隋唐の仏教と国家 113／江戸化物草紙 119／ミシェル・フーコー情熱と受苦 120／中国路地裏物語 121／まだら文 123／文福茶釜 124／前日島 125／ゴールド・マウンテン 127／〈古代中国と古代日本の常世観・異界観〉128／マイトレイ 134／文明のなかの博物学 136／宇宙を呑む 137
〔二〇〇〇〕映画渡世&日本映画史 138／ムネモシュネ 140／リヴァイアサン 142／中国「戯れ歌」ウォッチング 143／今ひとたびの戦後日本映画 144／西遊記 150／江戸百夢 151／大阪笑話史 152／大正美人伝 154／翻訳夜話 155／刺客の青い花 157
〔二〇〇一〕ロードショーが150円だった頃 158／唐シルクロード十話 159／加田伶太郎全集 160／〈中島敦の中国小説〉162／桃源郷 166
〔二〇〇二〕昭和文学史 167／中国出版文化史 170
〔二〇〇三〕白檀の刑 176／〈「中国ミステリ」の愉しみ〉177
〔二〇〇四〕中国遊侠史 181／君よ弦外の音を聴け 182／中国民族主義の神話 184
〔二〇〇五〕纏足の発見 185
〔二〇〇六〕ゲーテさん こんばんは 186／東海道書遊五十三次 188／青春の終焉 189／〈川本三郎の映画評論〉191／〈美食家に学ぶ食の楽しみ〉192／王朝物語 194

［二〇〇七］中国 食の文化誌 197／紅楼夢の殺人 199

書物あれこれ 2 ――〈十八歳で感じた知的快感〉204／〈岩波文庫と私〉205

Ⅱ 中国の古典 中国の歴史 …… 209

論語 210／弟子 212／老子 213／孫子 214／劉邦 216／漢の武帝 217／司馬遷 218／史記列伝抄 221／三国志実録 223／随筆三国志 230／山海経 238／列仙伝・神仙伝 240／王羲之 247／荆楚歳時記 248／顔氏家訓 250／魏晋南北朝 251／隋の煬帝 252／煬帝 254／〈「唐代伝奇」〉256／唐詩選 257／〈読まずにきた本〉258／馮道 260／朱子伝 262／水滸伝 264／蜀碧・嘉定屠城紀略・揚州十日記 266／陶庵夢憶 267／聊斎志異 270／随園食単 272／両地書 273／中国の歴史 278／中国歴史・文学人物図典 280／中国傑物伝 281／中国ペガソス列伝 287／中国政治論集 292

書物あれこれ 3 ――〈「劇場」としての本棚〉294／〈手帳〉296

Ⅲ 書評（二〇〇八～二〇一八） …… 299

［二〇〇八］転生夢現 300／愛しの座敷わらし 302／出ふるさと記 304／ロスト・ジェネレーション 306／富士さんとわたし 309／紅顔 311／乱歩の軌跡 314／わたしの戦後出版史 316／被害者の娘 319

[二〇〇九] なにもかも小林秀雄に教わった&哲学は人生の役に立つのか 321／ロシア文学の食卓 324／漱石の漢詩を読む 326／山月記&弟子&李陵 328／夏王朝 329／サガン 331／運命 334／〈花田清輝〉335／幸田露伴 338／アンダルシアの肩かけ 341／舞台人走馬燈 343／まぼろしの王都 345／中国医学はいかにつくられたか 348

[二〇一〇] 「女装と男装」の文化史 349／読書雑志 352／菜根譚 354／言い残しておくこと&思い出袋 355／乾隆帝の幻玉 358／アガサ・クリスティーの秘密ノート 359／グリニッチヴィレッジの青春 361／玄奘三蔵、シルクロードを行く 364／巡礼コメディ旅日記 365／数になりたかった皇帝 367／自由生活 369／革命とナショナリズム 371／空白の一章 372

[二〇一一] 漢籍はおもしろい 374／科挙 375／京都うた紀行 377／忘れられた花園 379／ライフ 382／ナボコフ全短篇 384／キャベツ炒めに捧ぐ 387

[二〇一二] 江戸＝東京の下町から 389／白秋望景 391／鍾馗さんを探せ!! 393／パーディタ&ある女流詩人伝 396／梅原猛の授業 能を観る 398／辞書を育てて 400／先哲の学問 402／葬られた王朝 404／われらが背きし者 409

[二〇一三] 日高六郎・95歳のポルトレ 411／明日の友を数えれば 414／ヘタウマ文化論 416／図書館に通う 418／『青鞜』の冒険 420／佐藤君と柴田君の逆襲!! 422／記憶と印象 424

[二〇一四] 世界人名大辞典 426／歴史の温もり 428／秘密 430／中国近世の百万都市 432／唐代伝奇小説論 434／二千七百の夏と冬 436／夜はやさし 438／無名の人生 440／パリの家 442

[二〇一五] 京都〈千年の都〉の歴史 444／大和屋物語 446／最後の晩餐の暗号 449／不健康は悪なのか 451／幽霊塔 453／東京骨灰紀行 455／モンテ・クリスト伯 456／剣闘士に薔薇を 456／アメリカは食べる。459／いちまき 461

［二〇一六］カール・クラウス463／中国銅鑼の謎465／樹木の文化史468／老生470／偽りの書簡472／〈吉川〉論語&〈桑原〉論語&弟子475／大津絵476／敗北力478
［二〇一七］父母の記480／俳句世がたり482／メイン・ストリートのならず者485／謀略の都&灰色の密命&宿命の地487／五月の雪490／名探偵ホームズ全集492／秋田實 笑いの変遷494／湖畔荘496
［二〇一八］バテレンの世紀498／モスクワの誤解501／こないだ503／幻影の明治505／紫陽花舎随筆510／影の歌姫512／ただの文士515

書物あれこれ 4 ――〈「モノ」としての書物〉518／〈消える書店〉520

初出一覧

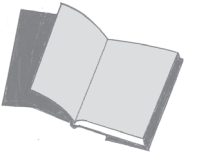
主要作品名索引／主要著者名索引

裝丁＝坂口　顯

書物あれこれ 1

三つ子の魂、百までも

幼年時代このかた、さまざまな本を読んできたが、字を覚えるのは遅かった。物心ついたときから、寝る前などに、母が絵本や童話を読んでくれるのを、楽しく聞いてはいたが、自分で字を覚えて読もうとは思わなかった。小学校に入る二、三か月前、父も母もさすがにこれでは困ると思ったらしく、私の前に「いろはがるた」を並べ、識字の特訓をほどこした。すぐ一つ一つのひらがなは覚えたけれども、バラバラの知識がつながらないので、あいかわらず文章が読めず、本も読めなかった。そんなある日、何気なく絵本を開いたとき、そこに書いてある短い文章が「まとまり」として目に入り、すっと理解できた。バラバラだった一字一字が瞬時につながり、読めたのである。あの瞬間の感激は忘れられない。



以来、活字は何でも読むようになり、漢字も苦にならなかった。私は富山県高岡の生まれだが、一九五二年二月、小学校二年生の終わりごろ京都に転居した。住んだのは西陣の千本界隈である。当時は日本映画の全盛期であり、千本界隈には封切館が林立していた。大家族だったため、ほとんど毎夜、家族の誰かのあとについて映画館通いをし、それこそ想像を絶するほど数多くの日本映画を見た。西

陣で過ごした小学生時代には、映画館通いのほか、もう一つ大きな楽しみがあった。貸本屋通いである。近くの貸本屋で毎日だいたい二、三冊、雑誌や漫画および種々の小説などを借り、それを一日で読みきるのが日課だった。このときおのずと「速読」のテクニックが身についたのかもしれない。

映画と貸本に明け暮れた至福の日々はやがて終わる。中学入学と同時に、映画館も貸本屋もない閑静な、賀茂川上流の住宅地に引っ越したのだ。一九七六年、金沢大学に勤めるまでこの家で過ごし、中学、高校、大学および大学院時代を送った。この間、時の経過とともに、読む本も変わっていった。大学に入ってしばらくは、フランスの小説や評論を濫読し（むろん翻訳で）、中国文学を専攻してからは、多種多様の中国古典が中心になった。

「書物逍遥」というより「書物放浪」ともいうべき、私の読書遍歴をふりかえると、字を覚えたときと同様、ある本を読むことがおのずと次の本を読むことにつながるという、連鎖のなかで、おもしろく本を読みつづけてきたように思われる。まさに「三つ子の魂、百までも」である。　（2010.1）

忘れられない一冊

私の手元に古色蒼然とした一冊の童話集がある。大正十五年（一九二六）、世界童話大系刊行会刊の「世界童話大系」第九巻である。重厚な装幀で全六百八十四頁、ずしりと重い。総ルビではないが、丹念にルビが付されており、所々に彩色図版が入っている。収録されているのは、『ラ・フォンテーヌ寓話集』『ペロー童話集』（いずれも佐々木孝丸訳）および『和蘭童話集』（松村武雄訳）である。

この童話集は私が生まれる前から父の書斎にあったが、最初から全二十三巻のうち何冊か欠けていたようだ。今を去ること半世紀余り、大家族で住んでいた家から引っ越すにあたって、道具類を処分することになり、父の蔵書もほとんど古書店行きとなった。

このとき、世界童話大系も処分対象となったが、たまたま私が自分の部屋に持ち込んでいた第九巻だけが残ったのだった。私はこのなかに収録された『ペロー童話集』がことのほか好きで、「青髭」「長靴を穿いた猫」「サンドリヨン」等々を、読むたびにぞっと恐怖を覚えながら、手元に置いて愛読していたのである。

以来、長い歳月が流れ、京都から金沢へ、金沢からまた京都へと、何度も引っ越しをくりかえしたが、この古びた童話集は私の本棚の隅に鎮座しつづけた。三年前、私は定年になり、勤め先の研究室に置いてあった大量の書籍を、わが家に持ち帰った。この大移動の渦中で、研究室に置いていたはずの童話集が行方不明になり、わが家に新しく並べた本棚をいくら探してもみつからない。

小学生のときからの古い友人を失ったような寂しい気持ちでいたところ、半年ほど前、大きな家具を動かしたさい、かげになっていた本棚の隅から、ひょっこり出てきた。研究室ではなく、もともと自室に置いてあったのだ。オーバーな言い方をすれば、失った過去を取りもどしたようなうれしさだった。以来、すぐ目に入る本棚の特等席に並べ、おりおりに存在を確認することになった。

私にとって、この古びた童話集は物語幻想の何たるかを示唆してくれた最初の本であり、また今は亡き父母と過ごした日々の記憶のよすがでもある。まさに忘れられない一冊の本である。

（2012. 6. 8）

I

書評

1987〜2007

今村与志雄 著

『魯迅ノート』

（筑摩書房、一九八七）

魯迅はむずかしい。そのむずかしさのよってくるところは、第一に言葉の問題、すなわち魯迅の表現そのものの難解さにあり、第二には執筆状況、いいかえれば魯迅をとりまく周辺の状況のとらえがたさにあると思われる。後者の傾向は、特にその雑文においていちじるしい。

長年、魯迅研究に心血をそそいでこられた今村与志雄氏の『魯迅ノート』は、こうした魯迅のわかりにくさをときほぐす示唆と発見に富んだ書である。著者は膨大な魯迅関係の文献を丹念に読み込むことによって、徹底的にディテイルにこだわり、そのこだわりのなかから新鮮な結論を引きだす。まさに「神は細部にやどりたもう」である。

たとえば、魯迅の名高い短篇小説「故郷」のなかに、若いころ「豆腐西施」と呼ばれた楊おばさんという人物が出てくる。ふつうこの「豆腐西施」は「豆腐屋小町」と訳される。ところが、著者は、魯迅が序文を書いた劉復の標点本『何典』（清末に張南荘が書いた呉方言の小説）に、「豆腐西施」という幽鬼が出てくることに着目し、呉方言の区域に属する魯迅の故郷の人々が、豆腐屋の楊おばさんをそう呼んだのは、「単に彼女が古代の越の美女西施におとらぬ美女だからそういうのではなくて、幽鬼の世界の『豆腐西施』に見たてたのであって、そこには、辛辣なからかいのニュアンスがあったのではなかろうか」云々と指摘する。私はかねがね、痩せこけて細い足をコンパスみたいに開き、冷笑的で手癖もわるいと描写される楊

おばさんが、いくら若いときのことでも、「豆腐屋小町」とは変だと不審に思っていたが、この文章を読んでその疑問が氷解した。

いきなり細かい話になってしまったが、この「豆腐西施」を含む本書の第一部「魯迅ノートから（上下）」は、著者が魯迅の『且介亭雑文』や『中国小説史略』などの翻訳を進めるかたわら、書き綴られたものであり、訳業によって鋭さを増した著者の感度のよさが、今も見たとおり、随所に発揮されている。

「魯迅ノートから（上）」は、林達夫、野口米次郎、高見順、正宗白鳥などの日本の文学者が、魯迅との同時代性（一九三〇年代）のもとに書いたエッセイを取りあげたものである。ここでは、「日本における魯迅評価の変遷」が浮き彫りにされると同時に、魯迅を鏡として論ずる者自身の認識のありよう、ひいては当時の日本の知識人の精神状況がおのずと映しだされており、はなはだ興味深い。

「下」のほうには、胡風の回想録をもとに、胡風、周揚、馮雪峰など魯迅をとりまく作家たちの錯綜した関係性を解明したエッセイや、「豆腐西施」のように魯迅における古語や俚語の使い方を取りあげた考察、さらに、魯迅が曹操の詩を「偽善的ではない。だから、いい」と評価したことや、北宋の詩人黄庭堅については、にべもなく「わたしは嫌いだ」と言い捨てたことなど、魯迅の面目躍如たる中国古典文学に対する発言を取りあげた文章が収められ、多様な角度から魯迅の人と文学を浮かびあがらせている。

本書第二部「魯迅――読書雑記」の、『魯迅日記』『魯迅書信集』など、魯迅の実生活を明らかにする資料についての論考や、「絶望の虚妄なることは、まさに希望と相い同じい」という魯迅の「箴言」の出典とされる、ハンガリーの詩人ペテーフィを論じた労作にも、魯迅に憑かれた著者の飽くことなき探究の跡が如実にうかがえ、感銘深い。

（1987. 11. 30）

井上靖 著

『孔子』

（新潮社、一九八九）

孔子の死後三百年を経て編纂された『論語』に見える孔子の言葉は、「朝に道を聞かば夕に死すとも可なり」という具合に、おおむね簡潔そのものである。しかし、この簡潔さは一歩踏み込むと、たちまち茫洋たる広がりと深さに変じ、いかようにも受け取れる多義性を示しはじめる。孔子の発言の一つ一つがそうした多義性を内包するばかりではなく、『論語』にはまた、随所に相反する方向性をもつ多様な発言が併存してもいる。したがって、『論語』という書物、ひいてはさまざまな側面をもつ孔子という稀有の存在の全体像を描出することは、至難の業にほかならない。

本書はこうした困難をみごとに乗り越え、孔子の全体像をヴィヴィッドに描きあげることに成功している。この成功は、なんといっても第一に、表現対象つまり孔子との距離の取りかたの巧みさによって、もたらされたと思われる。

著者は、本書の語り手として、蔫薑と呼ばれる架空の人物を設定している。蔫薑は亡国蔡の出身者で、二十五歳のときに、顔回、子路、子貢らの高弟とともに、放浪の旅をつづける六十歳の孔子とめぐりあう。以後、孔子に心酔した蔫薑は、七十三歳で孔子が没するまで、孔子教団の下働きをしながら、弟子の末席に連なることとなる。孔子の死後、三年の心喪を終えると、蔫薑は山里で隠者のような生活に入り、いつしか三十三年の月日が流れる。

本書は、この蔫薑という孔子教団の生き証人に、孔子とその弟子たちの織りなす壮大なドラマの進行係をつとめさせるのである。蔫薑は、じかに孔子の謦咳に接し、それぞれまたとないパーソナリティーをもった高弟たちとも親しく接触したことのある、孔子教団内部の人間ではあるけれども、その実まったくの脇役にすぎない。しかし、蔫薑にこうして脇役という位相を振り当てたことは、裏返せば、彼に、孔子とその高弟たちの織りなすドラマの一部始終を見渡す視座を与えたということにほかならない。しかも蔫薑は、いかなる事件も人物も、客観的にくっきりとした輪郭をもって回想するのに十分な、三十三年という歳月が経過した後に、語りはじめるのである。

表現対象と絶妙の距離をもつ、こうした語り手を設定したことによって、本書の小説空間には、未曽有の乱世を生きた孔子という人物の魅力、またおのおの個性的なその高弟たちとの関係性が、臨場感を帯びて、鮮やかな全体として浮かびあがっている。まさしく手練の小説技法というべきであろう。

ここに浮かびあがる孔子の貌は、まさしく「烈しさと穏やかさ。厳しさと優しさ、温かさと冷たさ。――こうした反対のもの、相反するものが、同居しているというか、一緒になっているというか、そうした状態にある魅力」に満ち、乱世に翻弄されながら陰湿な絶望などさかしらとして笑い飛ばし、「死生命あり」と大らかに生き抜くさまを描ききって、爽快である。孔子に対する、なみなみならぬ理解と共感の美しい結実だといえよう。

（1989. 10. 23）

酒見賢一 著

『後宮小説』

（新潮社、一九八九）

第一回日本ファンタジーノベル大賞（一九八九年）を受けたこの小説は奇想天外、無類におもしろい。この小説の構成と仕掛けは、実にうまくできている。十七世紀初頭、明末の中国をモデルとして設定された、架空の王朝である素乾王朝の滅亡のさまを、後宮の女性たちの動きに焦点を当てて描きだしているのだが、この記述方法に、まずひねりがきかされている。『素乾書』『乾史』『素乾通鑑』といった架空の歴史書を随所で引用し、いかにもまことしやかに、「史実」を述べるという体裁をとるのである。こうした仕掛けによって、ファンタジーと歴史という異質の要素が結び付けられ、メリハリのきいた物語空間が作りだされている。意表をついた構成の妙といえよう。

意表をつくといえば、この小説は徹頭徹尾、周到に読者の常識や予断の逆をつくことを意図しているようにも見える。そもそも後宮にはセクシュアルにしてエロティックなイメージがつきものだが、『後宮小説』というタイトルにもかかわらず、この小説に登場する後宮の女性たちは、皇帝の愛人となるべく訓練中の少女ばかりであり、ヒロインの銀河にいたっては、まことに魅力的ではあるが、中性的で妖精のような存在として描かれている。後宮の唯一の真の男性である皇帝もまた、男装の麗人を思わせる。という具合に、ここで描かれる後宮世界になまぐささはなく、まさしくファンタジックなのである。後宮という性的デカダンスに満ちた場所を舞台にしながら、それを逆手にとって、意想外の爽快なファンタジーを描き